令和６年２月１日に思う

新年早々ながら、私には気候変動の他にも気がかりなことがあります。

それは、近年の若者の「公務員離れ、霞が関（総務省など国の行政機関が集まるところ）離れ」と言う由々しき問題であります。人事院では、「霞ヶ関は優秀な人材集めに四苦八苦している。学生たちのキャリア、官僚離れの傾向が顕著だ」と嘆き、昨今「強い意志を持って国家を運営する」ぐらいの若者の出現を期待しているとするメッセージが目立っています。同感であります。

人の一生に行政（公務員）との関わりは少なくありません。ゆえに公務員の仕事の良し悪しが、人々の暮らしが豊かか否かが決まると言っても過言でないと思っています。逢坂誠二衆議院議員が北海道ニセコ町長時代、「住民の幸不幸を決めるのは職員の資質である」と言い切っていました。素直に頷けます。逢坂氏の言われるように、とくに山村過疎地域は、住民の暮らしの質と行政のあり方は深い関係にあると言えます。ゆえに社会や地域の活力に大きな影響をもたらす〝公務〟をめざす若者が増えてほしい、という願望が強くあります。

おかげさまで、わが川上村（役場）には有能な人材が集まっています。水源地の村づくりは崇高な理念です。かつ大きな使命があります。持続可能な地域として輝くためにも、「そんな地域で働きたい、地域を磨きたい」と名乗り出る若者にめぐり会いたい、となお強く思います。そのためにも、いい職場環境づくりに務めます。いい人材。どんどんご紹介、ご縁をください。これも立派な〝行政への参画〟と思って。（小欄は３月号で終了します）